

犬の肝細胞性腫瘍 48 例の病理学的検討

○二瓶 和美¹⁾, 山下 傑夫¹⁾, 加藤 静香²⁾ 内田 和幸³⁾, 小野 憲一郎¹⁾

1) 日本動物高度医療センター、2) サンリツセルコバ検査センター、3) 東京大学獣医病理学研究室

Pathological features of hepatocellular tumor in 48 dogs.

○kazumi NIBE¹⁾, masao YAMASITA¹⁾, sizuka KATO²⁾, kazuyuki UCHIDA³⁾, kenitiro ONO¹⁾

1) Japan Animal Referral Medical Center, 2) SanritsuZelkova Veterinary Laboratory, 3) the University of Tokyo

【はじめに】

1980 年に Patnaik らは犬の肝細胞性腫瘍は全て肝細胞癌であるとしたが、2014 年に広瀬らはその約半数は肝細胞腺腫であると報告し、肝細胞性腫瘍のうち肝細胞癌の発生頻度は未だ明らかとは言い難い。その要因の一つは、犬の肝細胞性腫瘍を組織学的な所見から客観的に良性と悪性に区分する基準が定められていないため、これまで我々は明らかな悪性所見がない限り良性の肝細胞腺腫と診断している。一方、肝細胞癌はその半数以上が転移を伴うとされていたが、Liptak ら (2004) は、孤在性の肝細胞癌の再発や転移は稀で、外科摘出後の臨床的挙動は良好であると報告している。この様に、犬の肝細胞性腫瘍については病理診断のみならず、病理診断と予後との関連について一定の見解は得られていない。そこで、日本動物高度医療センターで肝細胞性腫瘍を病理診断した 48 例について、病理組織像と予後の関連について検討した。

【材料と方法】

2011 年 7 月～2014 年 3 月に日本動物高度医療センターで病理検査を実施して肝細胞性腫瘍と診断し、予後調査が実施できた 48 症例を用いた。病理検索は HE 標本による形態観察を行い、肝細胞索の構築（細胞層、類洞構造）、肝細胞の形態、核分裂像、浸潤性について検討した。

【成績】

肝細胞腺腫と診断した症例では、肝細胞の索状構造が比較的保持され、一部では内皮細胞を伴う類洞構造が見られた。索状構造を構成する細胞数は正常肝細胞索よりも多く、4 個以上の部位も認められた。細胞形態は正常肝細胞と類似し、異型性は低く核分裂像も稀であった。一方、肝細胞癌と診断した症例の多くは、良性病変（腺腫）の中に悪性所見が混在していた。悪性増殖巣では、肝細胞の索状構造が消失していたが、一部には索状構造が保持される部位も認められた。細胞形態は大小不同が明瞭で、特に核に大小不同、形態の不整、クロマチン量の不均一などの異型所見が認められた。しかしながら、肝細胞腺腫と比較して核分裂像の有意な増加はなかった。肝実質や門脈への浸潤については、アーチファクトとの鑑別が困難であったが、動脈壁や他臓器への浸潤所見は、有意な悪性所見と判断した。以上の点から判断して、肝細胞性腫瘍 48 例は肝細胞腺腫 42 例 (88%)、肝細胞癌 5 例 (10%)、肝芽腫 1 例 (2%) であった。また、肝細胞腺腫と診断した 42 例のほとんど (41 例) の予後は良好であった。一方、肝細胞癌と診断した 5 例では遠隔転移は認められなかったものの、3 例に肝臓内腫瘍の増大が認められ、肝細胞腺腫と比較して予後は悪かった。

【考察】

当センターでは犬の肝細胞性腫瘍の約 9 割は腺腫で、これまでの報告とは異なり対象犬種の相違を考慮しても肝細胞性腫瘍のほとんどは肝細胞腺腫と考えられた。また、腺腫と診断した症例の予後は良好であったことから、肝細胞性腫瘍の診断基準としてはアーチファクトとの鑑別が困難なことが多い浸潤性を除くと、組織・細胞異型の判断が最も重要な点と考えられた。しかしながら、肝細胞癌と診断した症例では、良性病巣内に小型の悪性病巣が限局する 경우가少なくないため、病理診断には正常部との境界に加え、腫瘍内の複数ヶ所を検索することが重要と思われる。